

審査意見への対応を記載した書類(6月)

(目次) 学芸学部リベラルアーツ学科

1. 設置の趣旨・目的、養成する人材像、3つのポリシー(ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーをいう。以下同じ。)について、以下の点を明確にするとともに、必要に応じて適切に改めること。(是正事項).....6

1.(1)「設置の趣旨等を記載した書類(本文)」p.2の「①設置の趣旨及び必要性」において、本学科は「リベラルアーツを学びの中心に据える」ことや、「人間理解の基礎となるリベラルアーツを基本的素養として学ぶ」こと、また「社会で生じていることを相対化し、複眼的に見ることのできる能力が必要であり、リベラルアーツはその基礎となるもの」と説明している。これらを踏まえて、「リベラルアーツ学科では、人間を、人間の心理と人間が生活する場である地域の視点から理解することと課題解決の体験を通して、多様化、複雑化した現代社会で活躍する女性を養成するものである」と説明しているが、当該説明が本学科における「リベラルアーツ」の具体的な内容を説明しているのか、本学科の養成する人材像を説明しているのか判然としない。このため、本学科の学びの中心となる「リベラルアーツ」の具体的な内容が不明確であり、設置の趣旨・目的の妥当性に疑義があることから、本学が掲げる「リベラルアーツ」の具体的な内容を明確に説明すること。(是正事項).....6

1.(2) (1)のとおり、設置の趣旨・目的の妥当性が判断できないため、養成する人材像の妥当性も判断できない。このため、関連する意見への対応により明確にする、本学が扱う「リベラルアーツ」の具体的な内容を踏まえ、設置の趣旨・目的に照らし養成する人材像が適切に設定されていることを明確に説明するとともに、必要に応じて改めること。(是正事項).....9

1.(3) (2)のとおり、養成する人材像の妥当性が判断できないため、ディプロマ・ポリシーの妥当性も判断できないが、例えば養成する人材像の「1. 人間の心理やコミュニケーションに関する高度な知識を持った人」に対応するディプロマ・ポリシーが見受けられないことや、ディプロマ・ポリシーに掲げる「文理の枠を超えた視点」に対応する人材像が見受けられないなど、養成する人材像とディプロマ・ポリシーとの関係性が判然としない。このため、関連する意見への対応を踏まえつつ、養成する人材像とディプロマ・ポリシーとの関係性を明確にした上で、適切なディプロマ・ポリシーが設定されていることを図や表を用いて明確に説明するとともに、必要に応じて改めること。(是正事項).....12

1.(4) (3)のとおり、ディプロマ・ポリシーの妥当性が判断できないため、カリキュラム・ポリシーの妥当性も判断できないが、ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの相関は「設置の趣

旨等を記載した書類(本文)」p.5に示された図に「要約されている」と説明しているものの、当該図では、カリキュラム・ポリシーがどれに当たるのか判然としないことに加えて、ディプロマ・ポリシーとの対応関係も示されていない。このため、関係する意見への対応を踏まえ、カリキュラム・ポリシーを明示し、ディプロマ・ポリシーとの対応関係が明確になるよう図を改めつつ、適切なカリキュラム・ポリシーが設定されていることを明確に説明するとともに、必要に応じて改めること。(是正事項).....16

1.(5) (3)(4)のとおり、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーの妥当性が判断できないため、アドミッション・ポリシーの妥当性も判断できない。このため、関連する意見への対応を踏まえ、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに照らし、適切なアドミッション・ポリシーが設定されていることを明確に説明するとともに、必要に応じて改めること。(是正事項)22

2. 審査意見1(1)のとおり、本学科が掲げる「リベラルアーツ」の具体的な内容が不明確であるため、学科名称及び学位名称の妥当性も判断できない。このため、学科名称及び学位名称について、関連する意見への対応により明らかにする「リベラルアーツ」の内容を踏まえ、本学科の教育研究上の目的にふさわしい名称であることを明確に説明すること。(是正事項)25

3. 審査意見1のとおり、カリキュラム・ポリシーの妥当性が判断できないため、教育課程全体の妥当性も判断できない。このため、審査意見1への対応や以下に例示する点を踏まえて、本学科の教育課程が適切なディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに基づき、修得すべき知識や能力等に係る教育が網羅され、体系的性が担保された上で、適切に編成されていることを明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。(是正事項)27

3.(1) 「設置の趣旨等を記載した書類(本文)」p.7の「2)文理融合的な視点から人間理解をし、主体的な行動にむかう力をつける」において、本学科の特色は「人間のあり方を実証的・科学的に探究する“Human”の領域と“Society”の領域を相互に学ぶことを通して、人間理解を進めること」と説明していることから、「“Human”の領域」については、いわゆる人間科学を意味する「Human Science」を意図しているものと見受けられる。一方、「心理学の知識や技能を丁寧に学ぶことを主眼とする」とも説明されており、また、同書類 p.9の「(3)教育課程編成に関わる特色」では、「自分や他者について深く学び理解することを目指す」分野であると説明していることから、いわゆる人文科学を意味する「Humanities」を意図しているとも見受けられ、扱う分野が判然としない。このため、関連する意見を踏まえ、本学科が扱う「“Human”の領域と“Society”の領域」の内容を具体的かつ明確に説明すること。また、学生に対して学修する内容が適切に伝わるよう、必要に応じて「“Human”の領域と“Society”の領域」との説明を適切に改めること。(是正事項)27

3.(2) (1)のとおり、「“Human”の領域と“Society”の領域」の内容が判然としないが、「設置

の趣旨等を記載した書類(資料)」の資料1「履修モデル」によれば、「Human の PBL 科目を選択し、Human に関連する科目に重きを置いた場合」と「Society の PBL 科目を選択し、Society に関連する科目に重きを置いた場合」の2種類のモデルしか示されていないことから、「“Human”の領域」に特化した人材と「“Society”の領域」に特化した人材を養成する計画であるように見受けられる。しかしながら、本学科は、例えばディプロマ・ポリシーに「文理の枠を超えた視点」を掲げ、それにより授与する学位について、「設置の趣旨等を記載した書類(本文)」p.8で「文理融合型のリベラルアーツという複合的な分野」と説明していることなどを踏まえると、特定の分野に偏らない異分野融合的な人材を養成する計画であると見受けられることから、適切な履修モデルが示されているのか疑義がある。このため、本学科の養成する人材、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに基づいた適切な履修モデルを示すとともに、学生がディプロマ・ポリシーに掲げる素養を確実に修得できる履修体系が組まれていることを明確に説明すること。(是正事項)29

3.(3) 審査意見1(4)のとおり、カリキュラム・ポリシーの妥当性が判断できないため、ディプロマ・ポリシーに掲げる「文理の枠を超えた視点」を達成するためのカリキュラム・ポリシーが判然としないが、「設置の趣旨等を記載した書類(本文)」p.7では、本学科の教育上の特色である「文理が融合した学びを展開できる環境」として、「文理異なる学科が同一キャンパス内にあり、それぞれの学科が提供する専門教育を互いに補完し合うことが可能である。この利点を活かすことで、文理融合的な学びを・・・提供できる」ことや、「学問領域の範囲を超えての学びを可能にする」と説明している。しかしながら、専門科目のカリキュラムには、心理学などの文系科目が多く見受けられるが、理系科目については、科目区分「データスキル科目」に見受けられるものの、心理学などの学修に必要なデータスキルの内容に限った科目しか見受けられないことから、理系の内容を学修する科目が少ないと見受けられ、「文理の枠を超えた視点」や「文理が融合した学び」のための教育課程をどのように編成しているのか判然としない。このため、関連する意見への対応を踏まえ、ディプロマ・ポリシーに掲げる「文理の枠を超えた視点」を修得するために、どのように「文理が融合した学び」や「学問領域の範囲を超えての学び」のための教育課程を編成しているのかについて、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーとの関係性を明確にしつつ、具体的に説明すること。(是正事項)31

3.(4) 「設置の趣旨等を記載した書類(本文)」p.7において、本学科の教育上の特色として「“Human”分野ならびに“Society”分野に関わるさまざまなレベルの課題解決を模索する学びを展開する PBL 科目を中心に、実践的な学びを入学直後から展開し、課題解決能力を身に付け、リーダーシップを発揮して意思決定に携わることのできる能力を育成することが本学科の強みであり、最大の特色である」と説明し、同書類 p.5では「PBL 科目は総合的に、気づく力、観る力、磨く力、繋ぐ力というディプロマ・ポリシーすべてにつながるものである」と説明していることから、本学科の教育上「PBL 科目群」が重要な位置づけであるように見受けられる。しかしながら、カリキュラム・ポリシーにおいて、学修成果の評価の在り方等に関する具体的な記述が見受けられない

ことから、「PBL 科目群」を通じて涵養しようとする素養が十分に身に付けられる計画となっているのか判断としない。このため、カリキュラム・ポリシーは、学修成果をどのように評価するのかの方針も含むものであることを踏まえ、「PBL 科目」を含め、教育課程全体の学修成果の評価の在り方を明確に説明すること。(是正事項)33

4. 審査意見1(5)のとおり、アドミッション・ポリシーの妥当性が判断できないため、入学者選抜の方法の妥当性についても判断できない。このため、関連する意見への対応や以下に例示する点を踏まえて、本学科の養成する人材像、3つのポリシーに基づいた適切な選抜方法であることを明確に説明するとともに、必要に応じて改めること。(是正事項)34

4.(1) アドミッション・ポリシーでは、「高等学校までの履修内容のうち、「国語」、「英語」を通じて、コミュニケーションの基礎となる、聞く・話す・読む・書く力を身につけている」ことを掲げている。しかしながら、「設置の趣旨等を記載した書類(本文)」p.15 において、例えば、一般選抜入試では「文理融合の特徴及びアドミッションポリシーに照らし合わせて、英語・国語・数学のうち2科目を選択必須とする」と説明し、「自己推薦入試<基礎学力型>として、英語・国語・数学・理科(化学・生物・化学基礎+生物基礎)から1科目選択する」と説明しているように、英語や国語を必ずしも選択しなくてよい場合、本学科の教育を受けるために入学者選抜段階で求める資質・能力を適切に評価・判定できる選抜方法となっているのか疑義がある。このため、選抜方法ごとに、アドミッション・ポリシーに掲げるどの資質・能力を、どの方法によって評価・判定するのかを明確に説明すること。(是正事項)34

4.(2) 「設置の趣旨等を記載した書類(本文)」p.15 において、「特徴的な入試として『探究型(探究 LIVE 型, SHOIN 探究型, 探究学習評価型)』を設定する」と説明している。しかしながら、「この3タイプはいずれも本学科が修得を目指す PBL 型の探究学習の基礎力を測定することを目的とした入試である」と説明しているものの、3タイプそれぞれの違いについて説明されていないため、選抜方法が判断とせず、アドミッション・ポリシーに基づいた適切な選抜方法になっているか判断ができない。このため、探究型の3タイプそれぞれについて、具体的な選抜方法を明確に説明すること。(是正事項)36

5. 教員資格審査において、「不可」や「保留」、「適格な職位・区分であれば可」となった授業科目について、当該授業科目を担当する教員を基幹教員以外の教員で補充する場合には、主要授業科目は原則として基幹教員が担当することとなっていることを踏まえ、当該授業科目の教育課程における位置付け等を明確にした上で、当該教員を後任として補充することの妥当性について説明すること。(是正事項)37

6. 基幹教員の年齢構成が高齢に偏っていることから、教育研究の継続性の観点から、若手教

員の採用計画など教育研究実施組織の将来構想を明確にすること。(改善事項)38

7. 「設置の趣旨等を記載した書類(本文)」p.12 の「(1)教育方法」において、「授業は、講義、演習、実験、実習もしくはそれらの併用により行う」と説明している。一方で、同書類 p.20-21 の「(2)校舎等施設の整備計画」では、本学科の「教育課程においては、講義室、演習室、情報処理室が必要となる」と説明しているが、「実験」を実施する「実験室」について説明がないことから、本学の教育課程を実施するための必要な施設・設備が十分に整備されているが疑義がある。このため、「実験」を実施する科目や、当該科目のために必要となる施設・設備を明らかにし、施設・設備が本学科の教育研究に支障なく十分に整備されている計画であることを明確に説明すること。(是正事項)39

8. 申請書類について、例えば「設置の趣旨等を記載した書類(本文)」において、p.5～6において「基礎科目群の学びの上に・・・データスキル科目群を配置される」と文法が誤っていると見受けられる記載や、p.16 において「・・・を活用しので、」と訂正線が付されている文字が見受けられるなどの誤記等が見受けられることから、申請書類全般について網羅的に再点検を行った上で、適切に改めること。(是正事項)40

9. 「学生の確保の見通し等を記載した書類(本文)」p.33 において説明している学生確保に関するアンケート調査の結果の分析について、クロス集計の結果は「24 人」とであると説明しており、本学科の入学定員 40 名を満たさない結果となっている。また、当該クロス集計結果に対し、学芸学部既設学科における過去3年間の志望度別入学率の平均を乗じることにより、「74 人」が対象となり得る人数であると結論付けているが、本学科は「リベラルアーツ」を扱う、既設学科とは異なる特色を持つ学科であることを踏まえれば、既設学科の過去3年間の平均入学率を用いることの妥当性に疑義がある。さらに、この「74 人」について、「仮に、第2、第3志望者について既設学科の統計的数値を新設学科に適用することに難しい面があるとして、この比率を2分の1として見積もったとして・・・厳しく見込んで 46 人が選抜対象者と予測し、40 人の入学生を見込める」と説明しているが、2分の1と見積もる根拠について説明がなく、「46 人」と見込むことの妥当性にも疑義がある。したがって、客観的かつ妥当な根拠が示されていないことから、入学定員に対応した学生の確保を長期的かつ安定的に図ることができる見通しがあるとは判断できないため、改めて客観的かつ具体的なデータ等の根拠に基づき明確に説明すること。(是正事項)41

(是正事項)学芸学部リベラルアーツ学科

1. 設置の趣旨・目的、養成する人材像、3つのポリシー(ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーをいう。以下同じ。)について、以下の点を明確にするとともに、必要に応じて適切に改めること。

1.(1)「設置の趣旨等を記載した書類(本文)」p.2の「①設置の趣旨及び必要性」において、本学科は「リベラルアーツを学びの中心に据える」ことや、「人間理解の基礎となるリベラルアーツを基本的素養として学ぶ」こと、また「社会で生じていることを相対化し、複眼的に見ることのできる能力が必要であり、リベラルアーツはその基礎となるもの」と説明している。これらを踏まえて、「リベラルアーツ学科では、人間を、人間の心理と人間が生活する場である地域の視点から理解することと課題解決の体験を通して、多様化、複雑化した現代社会で活躍する女性を養成するものである」と説明しているが、当該説明が本学科における「リベラルアーツ」の具体的な内容を説明しているのか、本学科の養成する人材像を説明しているのか判然としない。このため、本学科の学びの中心となる「リベラルアーツ」の具体的な内容が不明確であり、設置の趣旨・目的の妥当性に疑義があることから、本学が掲げる「リベラルアーツ」の具体的な内容を明確に説明すること。

(対応)

審査意見でのご指摘を踏まえ、本学にて改めて「リベラルアーツ」の定義を定めたため、その説明を行う。

(1)リベラルアーツ教育が必要とされている背景

①全国的な情勢

・VUCA の時代となり、社会の複雑性はますます増大し、先行きが不透明で、将来的な予測が非常に困難な社会になってきている。また、多様な人々が多様な価値観を持ち生活することが当たり前になってきてもいる。この状況に適応し、課題を解決するためには、単一的な学問を学ぶだけでは困難となっている。

・社会で生じていることを相対化し、複眼的に見ることのできる能力を持つことで、課題に対応できる人材が必要である。

②地域的な動向

・本学が立地する東大阪市においても、有数の技術を有する企業が集積している一方で、若年女性人口の減少など、大都市近郊地域としてさまざまな課題に直面しており、多様性に配慮しつつ、幅広い視野で課題に対応する人材が求められている。

(2)本学の考えるリベラルアーツの定義

一般的にリベラルアーツとは、古代ギリシャ・ローマ時代に起源を発する自由な知的探究のための学問領域のことだとされており、人文学、社会科学、自然科学などの分野の基礎知識を横断的

に学び、幅広い知識を取得することで、多角的な視点や思考力を身につけることだと考えられていることが多い。

一方、現代社会においては、社会生活に必要とされる膨大な知識を学び、自己形成を果たすことが求められている。しかも知識は日々更新されており、その総量は増え続けるばかりである。そうした膨大な知識をすべて学び尽くすことは、ほぼ不可能であり、一般的に考えられているリベラルアーツを4年間の学士課程教育で実現するのは無理がある。

しかしながら、地域社会も含めた現代的課題に対応するためには、幅広い視点の必要性は増大してきている。

以上の状況をふまえ、本学では「知識の修得を目的とする教育(知識の修得)」から「知識を活用する力を修得することを目的とする教育(知恵の修得)」へと転換し、幅広い知識を修得した後、その活用を学ぶことで社会から求められる「複眼的・多面的な視点で、課題の解決を試みることができる人材」を養成することとした。

以上のことから、本学の考える「リベラルアーツ」の定義は以下の通りである。

リベラルアーツの定義

単なる知識の多寡ではなく、修得した知識を「何のために」、そして「どのように使うか」を重要視し、現代社会の担い手である市民の一人として知識を如何に使うかという、そうした知識の使い手としての“知恵”を「リベラルアーツ」と定義する。

新	旧
(<u>本学におけるリベラルアーツ</u>) <u>一般的にリベラルアーツとは、古代ギリシャ・ローマ時代に起源を発する自由な知的探究のための学問領域のことだとされており、人文学、社会科学、自然科学などの分野の基礎知識を横断的に学び、幅広い知識を取得することで、多角的な視点や思考力を身につけることだと考えられていることが多い。</u> <u>しかし一方で、現代社会においては、社会生活に必要とされる知識は膨大な量となっているにもかかわらず、それを学び、自己形成を果たすことが求められている。しかも知識は日々更新されており、その総量は増え続けるばかりである。そうした膨大な知識をすべて</u>	(追加)

<u>学び尽くすことは、ほぼ不可能である。とするならば、現代社会を生きていく上で重要となるのは、単なる知識の多寡ではなく、修得した知識を「何のために」、そして「どのように使うか」であろう。すなわち、現代社会の担い手である市民の一人として知識を如何に使うかという“知恵”が問われていると言えよう。</u> <u>本学科では、そうした知識の使い手としての“知恵”を「リベラルアーツ」と位置付ける。そしてかかる意味での“知恵”を、「気づく力」「観る力」「磨く力」「繋ぐ力」から涵養していくことを目指す。</u> <u>また、“知恵”は、自己形成を促すのみならず、持続可能な社会を支える有為かつ自律的な市民としての糧となり、自身の意図すら超えて利他へも繋がっていくものであろう。知恵”に焦点をあてることは、まさに本学が学園創立以来目指してきた「高い知性と豊かな情操を兼ね備えた、社会に貢献することができる女性」の育成という使命、理想を再確認することをも意味する。「リベラルアーツ学科」の開設を本学において「原点回帰」とする所以である。</u>	
--	--

(是正事項)学芸学部リベラルアーツ学科

1.(2) (1)のとおり、設置の趣旨・目的の妥当性が判断できないため、養成する人材像の妥当性も判断できない。このため、関連する意見への対応により明確にする、本学が扱う「リベラルアーツ」の具体的な内容を踏まえ、設置の趣旨・目的に照らし養成する人材像が適切に設定されていることを明確に説明するとともに、必要に応じて改めること。

(対応)

審査意見1に記載した通り、本学では「知識の修得を目的とする教育(知識の修得)」から「知識を活用する力を修得することを目的とする教育(知恵の修得)」へと転換し、幅広い知識を修得した後、その活用を学ぶことで社会から求められる「複眼的・多面的な視点で、課題の解決を試みることができる人材」を養成しようと考えている。この際、現代的課題を解決するためには課題の背景・要因を多面的に捉えた上で、課題解決を試みる必要がある。こうした社会から必要とされる人材を養成するためには以下の能力が必要であると考えたものである。

必要な能力①:基礎的な教養を有している

課題の背景・要因を多面的に捉えるためには、その基礎となる教養が必要不可欠である。また知識を活用できる力(知恵)の基盤には、知識の修得が必須であるため、「基礎的な教養」は必要である。

必要な能力②:課題に気づき、発見した課題の背景・要因を多面的に捉えることができる

課題を解決していくためには、課題に気づくことが重要である。この際、教養教育によって得られた幅広い視点を基盤に、課題の背景・要因を多面的に捉えることが重要である。本学では課題の背景・要因を多面的に捉えるためには、「複眼的かつ俯瞰的に捉える」「実証的・科学的に探究することができる」の2つの能力が必要と考える。

「複眼的かつ俯瞰的に捉える」とは、ある現象や問題、それらが生じた状況などについて、多角的に、また局所的な問題にとらわれることなく全体を見渡すように捉えるアプローチだと考えられる。このような視点は、複雑な問題についての解決策を探る際に、異なる分野や専門知識を横断的に結びつけることで、新たな解決策やアイデアを生み出すことにつながり、有効な視点だと考えられる。また、「実証的・科学的に探究することができる」能力とは、科学的方法を理解していることを前提とし、客観的なデータを用いて、観察可能な証拠に基づいて疑問や問題に対して体系的かつ批判的にアプローチする能力を指しており、個人の信念や先入観に左右されることなく問題点を発見し理解することが可能となる。

必要な能力③:発見した課題に対して、未来に繋がる課題の解決策を提示できる

社会から必要とされる人材を養成するには「必要な能力②」で記載した能力によって発見された課題に対して解決策の提示を行っていく力を養成する必要がある。

その際、提示された解決策が実質化されるためには、課題解決に関わる人々と協働的に取り組んでいかなければならない。課題に関係する人々と交わって意見を交換し、共に解決に向かうことが必要とされる。また、多様な人々が生活する現代社会では、社会や文化の多様性を理解・尊重することが非常に重要である。社会と文化の多様性を尊重した解決提案でなければ実効性が弱まる可能性があるからである。

以上のことから、本学科が養成する人材像を以下の通りとした。

リベラルアーツ学科が養成する人材像	
本学学芸学部を設置するリベラルアーツ学科では、大学全体で養成に取り組む人材像及び設置の趣旨を踏まえ、以下のような人材の養成を目指すものである。多様化、複雑化した現代社会で活躍するために、修得した知識や技術を如何に使うか、そのような“知恵”を持った人材を養成することを目的とする。より具体的には、以下のような人材を想定する。 基礎的教養を基盤として、人間を理解することと地域を理解することを通じて、現代の社会が抱えている諸課題に気づき、その課題について複眼的かつ俯瞰的に捉え、また、実証的・科学的に探究することで課題の背景・要因を多面的に捉え、社会と文化の多様性を尊重し、人間理解に立脚した社会貢献を果たす意欲を持って、未来に繋がる課題の解決策を提示できる人。	

新	旧
<u>多様化、複雑化した現代社会で活躍するために、修得した知識や技術をいかに使うか、そのような“知恵”を持った人材を養成することを目的とする。より具体的には、以下のような人材を想定する。</u>	<u>適切な人間理解に基づき、以下のような人材の養成を目指すものである。</u>
<u>基礎的教養を基盤として、人間を理解することと地域を理解することを通じて、現代の社会が抱えている諸課題に気づき、その課題について複眼的かつ俯瞰的に捉え、また、実証的・科学的に探究することで課題の背景・要因を多面的に捉え、社会と文化の多様性を尊重し、人間理解に立脚した社会貢献を果たす意欲を持って、未来に繋がる課題の解決策を提示できる人。</u>	<u>1. 人間の心理やコミュニケーションに関する高度な知識を持った人</u> <u>2. 社会・文化の多様性を尊重し実証的・科学的に探究する能力を持った人</u> <u>3. 人間理解に立脚した社会貢献を果たす意欲と行動力を身につけた人</u>

新	旧
(教育研究上の目的)	(教育研究上の目的)

リベラルアーツ学科の教育研究上の目的は、<u>基礎的教養を基盤として、人間を理解することと地域を理解することを通じて、現代の社会が抱えている諸課題に気づき、その課題について複眼的かつ俯瞰的に捉え、また、実証的・科学的に探究することで課題の背景・要因を多面的に捉え、社会と文化の多様性を尊重し、人間理解に立脚した社会貢献を果たす意欲を持って、未来に繋がる課題の解決策を提示できる人材を養成することである。</u>	リベラルアーツ学科の教育研究上の目的は、<u>人間の心理やコミュニケーションに関する高度な知識、社会・文化の多様性を尊重し実証的・科学的に探究する力、人間理解に立脚した社会貢献を果たす意欲と行動力を学生に身につけさせることである。</u>
--	--

(是正事項)学芸学部リベラルアーツ学科

1.(3) (2)のとおり、養成する人材像の妥当性が判断できないため、ディプロマ・ポリシーの妥当性も判断できないが、例えば養成する人材像の「1. 人間の心理やコミュニケーションに関する高度な知識を持った人」に対応するディプロマ・ポリシーが見受けられないことや、ディプロマ・ポリシーに掲げる「文理の枠を超えた視点」に対応する人材像が見受けられないなど、養成する人材像とディプロマ・ポリシーとの関係性が判然としない。このため、関連する意見への対応を踏まえつつ、養成する人材像とディプロマ・ポリシーとの関係性を明確にした上で、適切なディプロマ・ポリシーが設定されていることを図や表を用いて明確に説明するとともに、必要に応じて改めること。

(対応)

審査意見1(2)の対応にて記載した通り、現代の社会的必要性から、養成する人材像を定めた。

(養成する人材像)

本学学芸学部を設置するリベラルアーツ学科では、大学全体で養成に取り組む人材像及び設置の趣旨を踏まえ、以下のような人材の養成を目指すものである。多様化、複雑化した現代社会で活躍するために、修得した知識や技術を如何に使うか、そのような“知恵”を持った人材を養成することを目的とする。より具体的には、以下のような人材を想定する。

基礎的教養を基盤として、人間を理解することと地域を理解することを通じて、現代の社会が抱えている諸課題に気づき、その課題について複眼的かつ俯瞰的に捉え、また、実証的・科学的に探究することで課題の背景・要因を多面的に捉え、社会と文化の多様性を尊重し、人間理解に立脚した社会貢献を果たす意欲を持って、未来に繋がる課題の解決策を提示できる人。

本学では養成する人材像を満たす人材に対して学士(リベラルアーツ)を授与するため、養成する人材像から、以下の通りディプロマポリシーを定めた。教育課程も踏まえながら、その説明を行う。養成する人材像と、3つのポリシーの対応関係は、後記の図にまとめられている。

(ディプロマポリシー)

リベラルアーツ学科は、養成する人材像および教育研究上の目的に基づき、本学の所定の課程を修め、次のような能力を身につけた学生の卒業を認定し、学位を授与する。

(DP1) 基礎的教養:特定の分野に偏らない、人間や社会、自然に関する基礎的知識と分析のための手法を身につけている

リベラルアーツ学科が掲げる養成する人材になるためには、まず、特定の分野に偏らない幅広い知識に裏付けられた基礎的教養を身につける必要があるため、一般教育・共通教育として本学で開設されている「学士課程基幹教育科目」を履修するに際して、特に「樟蔭教養科目」から「自然の理解」「人文の探究」「社会への視点」3つの領域それぞれにおいて、科目を選択し履修する。

また学科専攻科目から「基礎科目」を履修する(DP1)。

(DP2) 気づく力:修得した知識や技術を統合し、取り組むべき課題を発見することができる

その上で、人間を理解することと地域を理解することを通じて、現代の社会が抱えている諸課題を発見する力を養う必要があるため、リベラルアーツ学科専攻科目の「基礎科目」「人間を理解するための科目」と「地域を理解するための科目」から主要授業科目や必修科目を履修する(DP2)。

(DP3) 観る力:発見した課題について、その多様な背景に留意しながら複眼的かつ俯瞰的に観るとともに、身につけた手法を用いて探究することができる

(DP4) 磨く力:既存の知識、専門にとらわれず学び続け、修得した知識や技術を活かしながら課題解決に向けた努力ができる

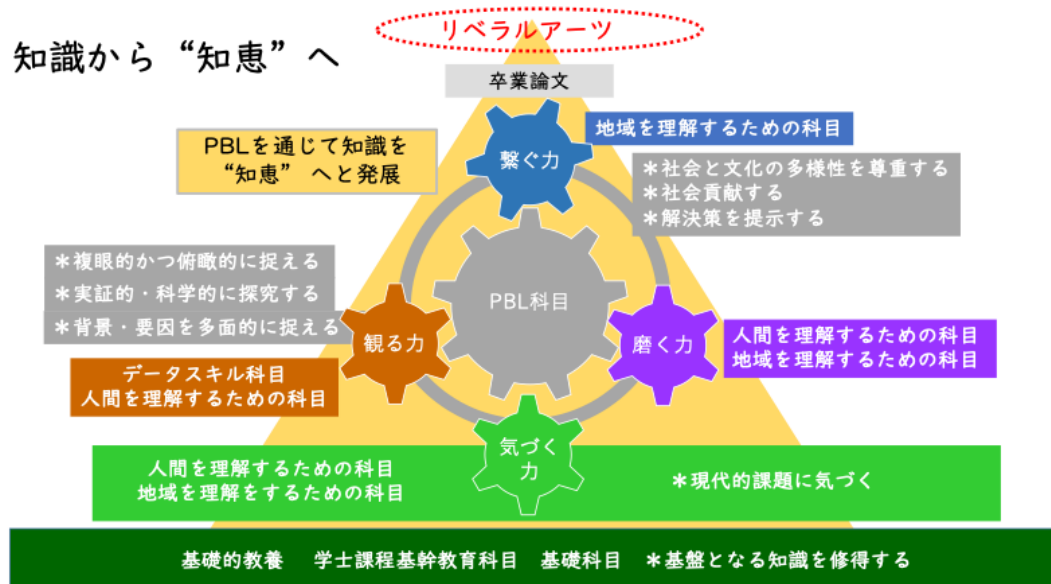
そこで発見された諸課題について、解決につなげていくためには、課題を多面的に捉え、深めていく力が必要である。そのように課題を複眼的かつ俯瞰的に捉え、かつ自己完結せず解決を探るためには、課題に関連する情報やデータを収集し、実証的・科学的に分析する力が必要であるため、リベラルアーツ学科専攻科目の「人間を理解するための科目」「地域を理解するための科目」「データスキル科目」を履修する(DP3,DP4)。

(DP5) 繋ぐ力:他者と繋がり、合理的判断、論理的思考だけでは解決困難な課題について協働して取り組むことができる

最後に、発見した諸課題について、解決策を提示することが必要となってくるが、その解決策が実質化されるためには、以下の点に留意しておく必要がある。まず、課題解決に関わる人々と協働的に取り組んでいかなければならないということである。もう一点は、社会の文化・多様性を理解・尊重した解決提案でなければ実効性が薄いことである。これらの人と人を繋ぐ要となる力や将来への希望に繋ぐ力は、それまでに「樟蔭教養科目」「人間を理解するための科目」「地域を理解するための科目」「データスキル科目」などで学んだ総合的な知識とスキルによって、身につくことになる(DP5)。

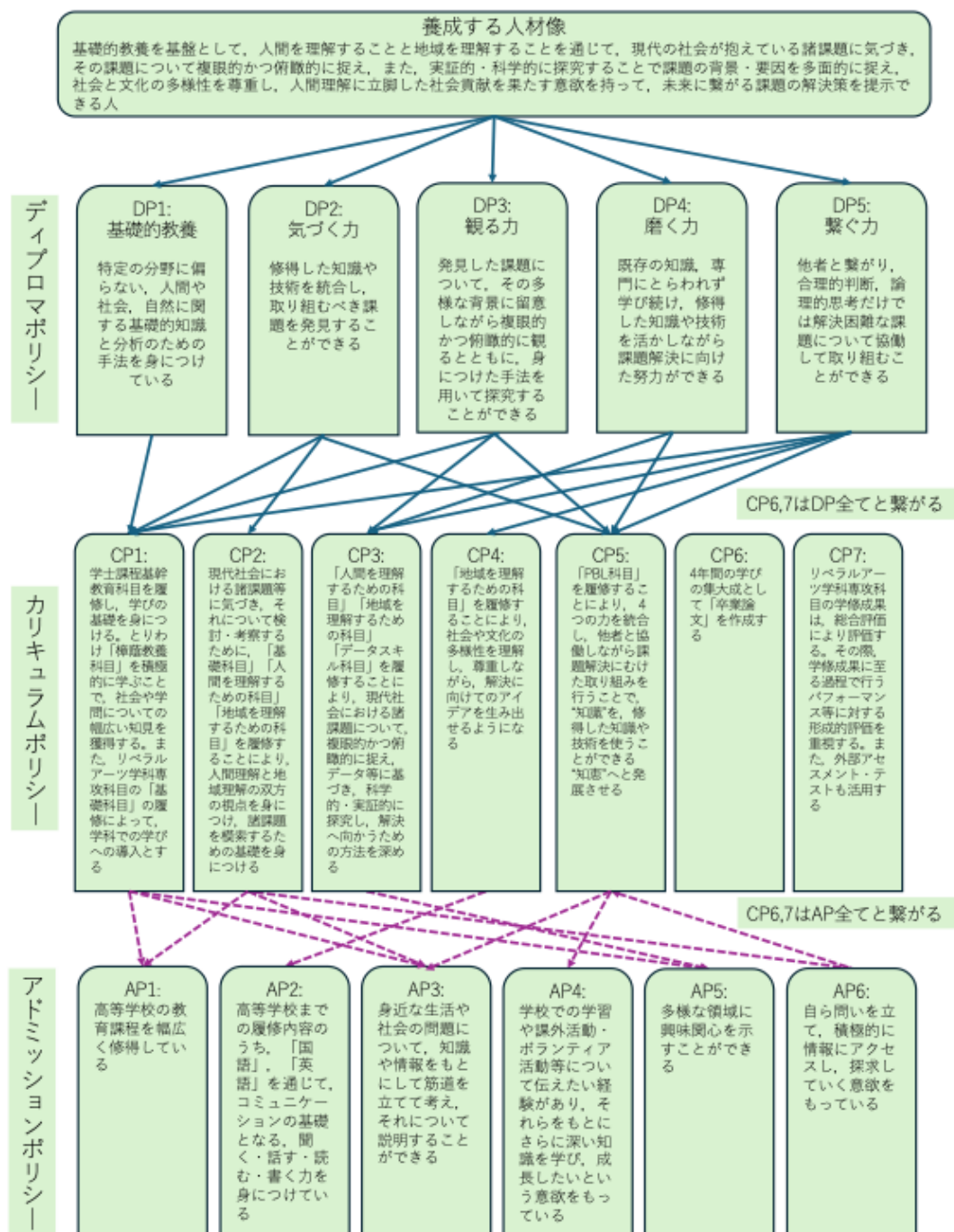
上記の流れについて、「PBL 科目」を関連させることで、学んだ知識を活用していく機会を提供し、修得した知識や技術を使うことができる“知恵”をもった人材を養成し、DP に記載された能力を達成した学生に対して、学士(リベラルアーツ)を授与する(詳細は構想図を参照)。

新	旧
(DP1) 基礎的教養:特定の分野に偏らない, 人間や社会, 自然に関する基礎的知識と分析のための手法を身につけている	無し
(DP2) 気づく力:修得した知識や技術を統合し, 取り組むべき課題を発見することができる	気づく力:修得した知識や技術を統合し取り組むべき課題を発見することができる
(DP3) 観る力:発見した課題について, その多様な背景に留意しながら複眼的かつ俯瞰的に観るとともに, 身につけた手法を用いて探究することができる	観る力:文理の枠を越えた視点から俯瞰的な判断ができる
(DP4) 磨く力:既存の知識, 専門にとらわれず学び続け, 修得した知識や技術を活かしながら課題解決に向けた努力ができる	磨く力:既存の知識, 専門にとらわれず学び続け, 課題解決に向けた努力ができる
(DP5) 繋ぐ力:他者と繋がり, 合理的判断, 論理的思考だけでは解決困難な課題について協働して取り組むことができる	繋ぐ力:合理的判断, 論理的思考だけでは結論に達することが困難でアンビバレントな課題についても臆することなく意思決定を行うことができる



リベラルアーツ学科全体構想図

養成する人材像と、3つのポリシーの対応関係



(是正事項)学芸学部リベラルアーツ学科

1.(4) (3)のとおり、ディプロマ・ポリシーの妥当性が判断できないため、カリキュラム・ポリシーの妥当性も判断できないが、ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの相関は「設置の趣旨等を記載した書類(本文)」p.5に示された図に「要約されている」と説明しているものの、当該図では、カリキュラム・ポリシーがどれに当たるのか判然としないことに加えて、ディプロマ・ポリシーとの対応関係も示されていない。このため、関係する意見への対応を踏まえ、カリキュラム・ポリシーを明示し、ディプロマ・ポリシーとの対応関係が明確になるよう図を改めつつ、適切なカリキュラム・ポリシーが設定されていることを明確に説明するとともに、必要に応じて改めること。

(対応)

本学のカリキュラムポリシーはディプロマポリシーを基盤として策定を行っており、その対応関係は資料に記載の通りであるが、以下、具体的な対応関係について説明を行う。

まず、改めてカリキュラムポリシーを提示する。

(CP1) 学士課程基幹教育科目(「樟蔭基礎科目」「言語科目」「数理情報科目」「樟蔭教養科目」「キャリア系科目」)を履修し、学びの基礎を身につける。とりわけ、「樟蔭教養科目」を積極的に学ぶことで、社会や学問についての幅広い知見を獲得する。また、リベラルアーツ学科専攻科目「基礎科目」の履修によって、本学科における学びへの導入とする。

(CP2) 現代社会における諸課題等に気づき、それについて探究・考察するために、「基礎科目」「人間を理解するための科目」「地域を理解するための科目」を履修することにより、人間理解と地域理解双方の視点を身につけ、諸課題を模索するための基礎を身につける。

(CP3) 「人間を理解するための科目」「地域を理解するための科目」「データスキル科目」を履修することにより、現代社会における諸課題について、複眼的かつ俯瞰的に捉え、データ等に基づき、実証的・科学的に探究し、解決へ向かうための方法を深める。

(CP4) 「地域を理解するための科目」を履修することにより、社会や文化の多様性を理解し、尊重しながら、解決に向けてのアイデアを生み出せるようになる。

(CP5) 「PBL 科目」を履修することにより、4つの力を統合し、他者と協働しながら課題解決に向けた取り組みを行うことで、“知識”を、修得した知識や技術を使うことができる“知恵”へと発展させる。

(CP6) 4年間の学びの集大成として「卒業論文」を作成する。

(CP7) リベラルアーツ学科専攻科目の学修成果は、総合評価により評価する。その際、学修成果に至る過程で行うパフォーマンス等に対する形成的評価を重視する。また、外部アセスメント・テストも活用する。

次に、ディプロマポリシーと上記のカリキュラムポリシーとの対応について説明する。

(DP1) 基礎的教養:特定の分野に偏らない、人間や社会、自然に関する基礎的知識と分析のための手法を身につけている

〈対応する CP〉 CP1

CP1は、学士課程基幹教育科目(「樟蔭基礎科目」「言語科目」「数理情報科目」「樟蔭教養科目」「キャリア系科目」)の履修を通じて学びの基礎を身につけること、また学士課程基幹教育科目のうち「樟蔭教養科目」を積極的に学ぶことで、社会や学問についての幅広い知見を獲得することを目的としている。それに加えて、リベラルアーツ学科専攻科目「基礎科目」を履修することにより、基礎的教養を本学科におけるその後の学びへの導入とすることを意図している。そうした点から CP1は、DP1に対応する。

(DP2) 気づく力:修得した知識や技術を統合し、取り組むべき課題を発見することができる

〈対応する CP〉 CP1・CP2・CP5

CP2は、学科専攻科目のうち「基礎科目」「人間を理解するための科目」「地域を理解するための科目」を履修することで、人間を理解するための視点や地域を理解するための視点から現代社会における諸課題等に気づくことを目的としていることから、DP1・DP2に対応している。そして「PBL 科目」を履修することで、CP2により獲得した気づく力を起点として、その気づく力をさらに鋭いものとしてレベルアップを図り、知識を「知恵」へと発展させられるようにすることを意図していることから CP5も DP2に対応している。

(DP3) 観る力:発見した課題について、その多様な背景に留意しながら複眼的かつ俯瞰的に観るとともに、身につけた手法を用いて探究することができる

〈対応する CP〉 CP1・CP3・CP5

CP1は、「学士課程基幹教育科目」の履修を通じて学びの基礎を身につけること、とりわけ「樟蔭教養科目」を積極的に学ぶことで、社会や学問についての幅広い知見を獲得することを目的としている。加えて、学科専攻科目の「基礎科目」を履修し、基礎的教養を得ることができる。それらは観る力の背景となる。したがって CP1 は DP3 に対応している。CP3では、「地域を理解するための科目」を履修することで、発見した課題の背景に存在する多様な要因要素に目を配れるようになり、複眼的に、また俯瞰的に観ることができるようになることを目指す一方、「人間を理解するための科目」や「データスキル科目」を履修することで獲得した手法を活かし、発見した課題につい

て複眼的かつ俯瞰的に観ること、またそれを実証的・科学的に分析・探究できるようになることを目指している。こうした点から CP3は、DP3に対応している。さらに、DP3の観る力は、「PBL 科目」を履修することで、それまでに身につけた知識や手法を統合し、さらに広い視野や多様な視角を獲得することにより、問題解決への歩みを進めることができるようになることから、CP5も DP3に対応している。

(DP4) 磨く力:既存の知識, 専門にとらわれず学び続け, 修得した知識や技術を活かしながら課題解決に向けた努力ができる

〈対応する CP〉 CP3・CP5

CP3は、「人間を理解するための科目」「地域を理解するための科目」「データスキル科目」を履修することで、現代社会における諸課題について、複眼的かつ俯瞰的に捉え、データ等に基づき、実証的・科学的に探究し、解決へ向かうための方法を深めることを目指している。そこでは、それまでに獲得した知識や視点、手法に磨きをかけてより深めて行くことにも努めることになる。それはひいては気づく力や観る力に磨きをかけることをも意味し、課題を解決する力を高めていくことにつながる。こうした点から CP3は DP4に対応する。また、こうした磨く力は、「PBL 科目」を履修することで、より実際的な問題に向き合うことにより磨かれ、“知恵”へと発展することになることから、CP5も DP4に対応している。

(DP5) 繋ぐ力:他者と繋がり, 合理的判断, 論理的思考だけでは解決困難な課題について協働して取り組むことができる

〈対応する CP〉 CP1・CP3・CP4・CP5

CP1は、「学士課程基幹教育科目」の履修を通じて学びの基礎を身につけること、とりわけ「樟蔭教養科目」を積極的に学ぶことで、社会や学問についての幅広い知見を獲得することを目的としている。加えて、学科専攻科目の「基礎科目」を履修し、基礎的教養を得ることができる。それらは磨く力の背景となる。CP3では、「地域を理解するための科目」「人間を理解するための科目」、「データスキル科目」を履修することで、発見した課題について複眼的かつ俯瞰的に観ること、またそれを実証的・科学的に分析・探究できるようになる。こうした観る力は繋ぐ力の基礎となることから CP3は、DP3に対応している。そして、地域における諸課題を実際に解決していく際には、周囲の関係する多くの人々と協働しながら取り組むことが必須となる。そのため CP4に掲げる通り、「地域を理解するための科目」を履修することで、社会や文化の多様性を理解し、それを尊重する姿勢を自らのものとするとは、DP5の解決困難な問題について協働して取り組むことができるようになるという繋ぐ力を涵養することになる。そうした点から CP4は、DP5に対応している。加えて、繋ぐ力も「PBL 科目」を履修することで、気づく力・観る力・磨く力と連動しながら、より確かな力となり“知恵”へと発展することから、CP5も DP5に対応している。

最後に、「卒業論文」に関わる CP6は、「卒業論文」を本学科における学びの集大成と位置づけ

ていることから、DP1～5の全てに対応、関連している。CP7も学修成果の評価の方針を示したものであることから、これも DP1～5の全てに対応、関連する。

1)ディプロマポリシー新旧対照表(前出)

2)カリキュラムポリシー新旧対照表

新	旧
(CP1) 学士課程基幹教育科目(「樟蔭基礎科目」「言語科目」「数理情報科目」「樟蔭教養科目」「キャリア系科目」)を履修し、学びの基礎を身につける。とりわけ、「樟蔭教養科目」を積極的に学ぶことで、社会や学問についての幅広い知見を獲得する。また、リベラルアーツ学科専攻科目「基礎科目」の履修によって、本学科における学びへの導入とする。	4年間をととした学修の基礎となる学士課程基幹教育科目に関して、初年次教育において、本学のミッションに基づき「樟蔭基礎科目」「言語科目」「数理情報科目」を履修し、論理的思考力・コミュニケーション力・情報収集力等の基本となる学士力を獲得する。 自校教育科目である「樟蔭の窓」を初年次に履修し、大阪樟蔭女子大学で学ぶ意味を考え、また将来社会で自律した女性として生きるために必要な考え方を身につける。 学士課程基幹教育科目に関しては、初年次から自らの関心に応じて、しかしながら特定の領域に偏らないよう「自然の理解」「人文の探究」「社会への視点」3つの領域それぞれから科目を選択し(領域ごとに4単位選択必修)、問題を発見する力や解決に向けて継続的に取り組む力、他者への理解を踏まえ協力して活動できる力を獲得する。また、学修の成果を就業につなげ、実社会に役立てるために、1年次からキャリア系科目を配置する。 学科専攻科目に関しては、複雑かつ細分化された科学的知を総合する能力を養うことを目指す基礎的科目群として「知への扉」「知の技法」を初年次に履修し、現在人類が到達している知の現在を概略すると共に、知的好奇心の広がりを目指すことで、リベラルアーツ学科での学修の導入とする。
(CP2) 現代社会における諸課題等に関	記載なし

づき、それについて探究・考察するために、 <u>「基礎科目」「人間を理解するための科目」</u> <u>「地域を理解するための科目」を履修することにより、人間理解と地域理解双方の視点を身につけ、諸課題を模索するための基礎を身につける。</u>	
<u>（CP3）「人間を理解するための科目」</u> <u>「地域を理解するための科目」「データスキル科目」を履修することにより、現代社会における諸課題について、複眼的かつ俯瞰的に捉え、データ等に基づき、実証的・科学的に探究し、解決へ向かうための方法を深める。</u>	また、多様性及び少数者への配慮が求められる現代の社会において、独善に陥らないよう他者としなやかに意見交換し、協働的に取り組む力を身につけ、人間関係の要となつて活躍できるようになるための、コミュニケーション能力を養う科目群を配置する。 そして、AI をはじめとするテクノロジーの深化やグローバル化、価値観の多様化に代表される現代社会の現状について理解を深め、現代に生きる存在としての人間理解を“Human”分野と“Society”分野の両側面から捉え、課題解決に繋ぐ力を養う人間及び地域理解のための科目群を配置する。 一方、現代社会におけるさまざまな課題を発見し、解決につなげていくために必要なデータを社会調査などを通じて適切に収集し、分析するスキルを身につけるため、プログラミングの基礎やサイバーセキュリティを理解するデータスキル科目群を配置する。
<u>（CP4）「地域を理解するための科目」を履修することにより、社会や文化の多様性を理解し、尊重しながら、解決に向けてのアイデアを生み出せるようになる。</u>	記載なし
<u>（CP5）「PBL 科目」を履修することにより、4つの力を統合し、他者と協働しながら課題解決に向けた取り組みを行うことで、“知識”を、修得した知識や技術を使うことができる“知恵”へと発展させる。</u>	さらに初年次より、4年間を通してPBL科目群を配置し、現代の社会が抱えるさまざまな課題を多面的・多角的に分析し考察するとともに、自ら課題を発見し、その解決に取り組むために必要な能力を身につける。
<u>（CP6）4年間の学びの集大成として「卒業論文」を作成する。</u>	記載なし

(CP7) リベラルアーツ学科専攻科目の学修成果は、総合評価により評価する。その際、学修成果に至る過程で行うパフォーマンス等に対する形成的評価を重視する。また、外部アセスメント・テストも活用する。	記載なし
---	------

ディプロマポリシーとカリキュラムポリシーの対応関係

CP \ DP	基礎的教養 (DP1)	気づく力 (DP2)	観る力 (DP3)	磨く力 (DP4)	繋ぐ力 (DP5)
社会や学問についての幅広い知見を獲得する(CP1)	○ 学士課程基幹教育 科目群 基礎科目群	○ 学士課程基幹教育 科目群 基礎科目群	○ 学士課程基幹教育 科目群 基礎科目群		○ 学士課程基幹教育 科目群 基礎科目群
人間理解と地域理解の双方の視点を身につけ、諸課題を模索するための基礎を身につける(CP2)		○ 基礎科目群 人間を理解するための科目群 地域を理解するための科目群			
現代社会における諸課題について、複眼的かつ俯瞰的に捉え、データ等に基づき、科学的・実証的に検討し、解決へ向かうための方法を深める(CP3)			○ 人間を理解するための科目群 地域を理解するための科目群 データスキル科目群	○ 人間を理解するための科目群 地域を理解するための科目群 データスキル科目群	○ 人間を理解するための科目群 地域を理解するための科目群 データスキル科目群
社会や文化の多様性を理解し、尊重しながら、解決に向けてのアイデアを生み出せるようになる(CP4)					○ 地域を理解するための科目群
“知識”を、修得した知識や技術を使うことができる“知恵”へと発展させる(CP5)		○	○	○	○
		PBL科目群で、学んだ“知識”を統合し、“知恵”に発展。			
4年間の学びの集大成として「卒業論文」を作成する(CP6)	○	○	○	○	○
	4年間の学びは、卒業論文作成で集大成。				
学修成果は、総合評価により評価する。パフォーマンス等に対する形成的評価を重視する。外部アセスメント・テストも活用する(CP7)		○	○	○	○
		専攻科目群は、総合的に評価。アセスメントテストも活用。			

(是正事項)学芸学部リベラルアーツ学科

1.(5) (3)(4)のとおり、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーの妥当性が判断できないため、アドミッション・ポリシーの妥当性も判断できない。このため、関連する意見への対応を踏まえ、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに照らし、適切なアドミッション・ポリシーが設定されていることを明確に説明するとともに、必要に応じて改めること。

(対応)

アドミッションポリシー(以下、AP)は、ディプロマポリシー(以下、DP)に到達できる能力を有しているか、また、本学の学びを始めるために必要な能力を有しているか判断するために策定しており、以下の通り説明を行う。

(1)本学リベラルアーツ学科の AP は、以下の通りとなる。

1. 高等学校の教育課程を幅広く修得している。
2. 高等学校までの履修内容のうち、「国語」、「英語」を通じて、コミュニケーションの基礎となる、聞く・話す・読む・書く力を身につけている。
3. 身近な生活や社会の問題について、知識や情報をもとにして筋道を立てて考え、それについて説明することができる。
4. 学校での学習や課外活動・ボランティア活動等について伝えたい経験があり、それらをもとにさらに深い知識を学び、成長したいという意欲をもっている。
5. 多様な領域に興味関心を示すことができる。
6. 自ら問いを立て、積極的に情報にアクセスし、探究していく意欲をもっている。

(2)AP 策定の背景

AP は DP に到達できる能力を有しているか、また、本学の学びを始めるために必要な能力を有しているか判断するために策定した。具体的には、次の通りである。

AP1:

高校までの教育課程を幅広く修得していることは、大学の課程を学ぶにあたって必要であり、また広く教養を学ぶ「学士課程基幹教育科目」や「専攻科目」での大学教育の基礎となるため必要となる。(⇒DP1, DP2, DP3)

AP2:

コミュニケーションの基礎となる力(聞く・話す・読む・書く力)は、他者と繋がり、解決困難な課題に対して協働して取り組むことができるために必要であり、他者と協働することで自らを磨く力や「繋ぐ力」の基礎となる。(⇒DP4, DP5)

AP3:

物事を筋道を立てて論理的に考えることは、基礎的教養を身につけ、生活や社会の中の矛盾

や課題に「気づく力」として必要である(DP1, DP2)。また, 知識や情報をもとにして筋道を立てて考える力は, 幅広い知識の修得とともに, 課題の背景等について複眼的かつ俯瞰的な視点で「観る力」に繋がる(⇒DP3)。さらには論理的思考によって自らを磨く力や他者と繋がる力(⇒DP4, DP5)と関連する。

AP4:

高校までの学校生活等で何かに打ち込んだ経験や探究した経験, またそれに伴う深い知識を学び, 成長したいという意欲は, これまでの経験から新たな気づきや発見につながり(⇒DP2, DP3), 「学び続け, 修得した知識や技術を活かしながら課題解決に向けた努力ができる」という「磨く力」の素地となり, 大学での活動を通じて他者と関係する力にも繋がる(⇒DP4, DP5)。

AP5:

幅広い物事に興味関心を持つことは, 専門性にとらわれない教養の学びを効果的に進めることができる(⇒DP1)。その力は社会における課題の気づきに繋がるものである(⇒DP2)。また幅広い学びを応用することで, 複眼的・俯瞰的な「観る力」へ展開できる(⇒DP3)。多様な領域に関心を持つことで, 多様な他者の理解にもつながる(⇒DP5)。

AP6:

物事に問いを立て, 積極的に情報にアクセスし, 探究していく意欲は, 課題を発見するための基礎となるものであり, 大学の全ての学びで必要とされる能力である。どのような基礎的教養を身につけるか(⇒DP1), そこからどのような課題に気づき(⇒DP2), 実証的・科学的な観点からその課題に迫っていくこと(⇒DP3)や, 探究する姿勢を通じて「磨く力」の素地となりうる(⇒DP4)。さらには, それらを総合して, 社会的課題の解決に向けた行動に移していく基礎的な力でもある(⇒DP5)。

(資料)

ディプロマポリシーとアドミッションポリシーの対応関係

リベラルアーツ学科アドミッションポリシーとディプロマポリシーの対応表

AP \ DP	基礎的教養 (DP1)	気づく力 (DP2)	観る力 (DP3)	磨く力 (DP4)	繋ぐ力 (DP5)
高等学校の教育課程を幅広く修得している (AP1)	○	○	○		
コミュニケーションの基礎となる、聞く・話す・読む・書く力を身につけている (AP2)				○	○
知識や情報をもとにして筋道を立てて考え、説明することができる (AP3)	○	○	○	○	○
伝えたい経験があり、さらに深い知識を学び、成長したいという意欲をもっている (AP4)		○	○	○	○
多様な領域に興味関心を示すことができる (AP5)	○	○	○		○
自ら問いを立て、探求していく意欲をもっている (AP6)	○	○	○	○	○

(是正事項)学芸学部リベラルアーツ学科

2. 審査意見1(1)のとおり、本学科が掲げる「リベラルアーツ」の具体的な内容が不明確であるため、学科名称及び学位名称の妥当性も判断できない。このため、学科名称及び学位名称について、関連する意見への対応により明らかにする「リベラルアーツ」の内容を踏まえ、本学科の教育研究上の目的にふさわしい名称であることを明確に説明すること。

(対応)

審査意見 1 で定めた本学科が掲げる「リベラルアーツ」の定義に基づき、以下の通り回答を行う。

(1)リベラルアーツの定義

現代社会においては、社会生活に必要とされる知識は膨大な量となっているにもかかわらず、それを学び、自己形成を果たすことが求められている。しかも知識は日々更新されており、その総量は増え続けるばかりである。そうした膨大な知識をすべて学び尽くすことは、ほぼ不可能である。とするならば、現代社会を生きていく上で重要となるのは、単なる知識の多寡ではなく、修得した知識を「何のために」、そして「どのように使うか」であろう。すなわち、現代社会の担い手である市民の一人として知識を如何に使うかという“知恵”が問われていると言えよう。

本学科では、そうした知識の使い手としての“知恵”を「リベラルアーツ」と定義する。そしてかかる意味での“知恵”を、「気づく力」「観る力」「磨く力」「繋ぐ力」から涵養していくことを目指す。

(2)教育研究上の目的

リベラルアーツ学科の教育研究上の目的は、基礎的教養を基盤として、人間を理解することと地域を理解することを通じて、現代の社会が抱えている諸課題に気づき、その課題について複眼的かつ俯瞰的に捉え、また、実証的・科学的に探究することで課題の背景・要因を多面的に捉え、社会と文化の多様性を尊重し、人間理解に立脚した社会貢献を果たす意欲を持って、未来に繋がる課題の解決策を提示できる人材を養成することである。

(3)学位の名称

本学科のディプロマポリシーは、養成する人材像および教育研究上の目的に基づき、本学の所定の課程を修め、次のような能力を身につけた学生の卒業を認定し、学士(リベラルアーツ)の学位を授与するとした。なお、学科名称と学位名称は、学生や社会に理解が得られやすいよう同じ名称とした。

(DP1) 基礎的教養:特定の分野に偏らない、人間や社会、自然に関する基礎的知識と分析のための手法を身につけている

(DP2) 気づく力:修得した知識や技術を統合し、取り組むべき課題を発見することができる

(DP3) 観る力:発見した課題について、その多様な背景に留意しながら複眼的かつ俯瞰的に観るとともに、身につけた手法を用いて検討することができる

(DP4) 磨く力:既存の知識,専門にとらわれず学び続け,修得した知識や技術を活かしながら課題解決に向けた努力ができる

(DP5) 繋ぐ力:他者と繋がり,合理的判断,論理的思考だけでは解決困難な課題について協働して取り組むことができる

(新旧対照表)

③ 大学,学部・学科等の名称及び学位の名称

(1)学科の名称

(2)学位の名称

新	旧
(1) 学科の名称 本学科の教育研究上の目的は,<u>「基礎的教養を基盤として,人間を理解することと地域を理解することを通じて,現代の社会が抱えている諸課題に気づき,その課題について複眼的かつ俯瞰的に捉え,また,実証的・科学的に探究することで課題の背景・要因を多面的に捉え,社会と文化の多様性を尊重し,人間理解に立脚した社会貢献を果たす意欲を持つて,未来に繋がる課題の解決策を提示できる人」の養成</u>であり,学科の名称は「リベラルアーツ学科」とする。英訳名称は「Department of Liberal Arts」とする。 (2) 学位の名称 本学部の学位の名称は,<u>単なる知識の多寡ではなく,修得した知識を如何に使うかという“知恵”,そうした知識の使い手としての“知恵”としての「リベラルアーツ」</u>を的確に表すため「学士(リベラルアーツ)」とする。学位の英訳名称は,「Bachelor of Liberal Arts」とする。	(1) 学科の名称 本学科の教育研究上の目的は,<u>「人間の心理やコミュニケーションに関する高度な知識,社会・文化の多様性を尊重し実証的・科学的に探究する力,人間理解に立脚した社会貢献を果たす意欲と行動力を学生に身につけさせること」</u>であり,学科の名称は「リベラルアーツ学科」とする。英訳名称は「Department of Liberal Arts」とする。 (2) 学位の名称 本学部の学位の名称は,<u>文理融合型のリベラルアーツという複合的な分野を的確に表すため「学士(リベラルアーツ)」</u>とする。学位の英訳名称は,「Bachelor of Liberal Arts」とする。

(是正事項)学芸学部リベラルアーツ学科

3. 審査意見1のとおり、カリキュラム・ポリシーの妥当性が判断できないため、教育課程全体の妥当性も判断できない。このため、審査意見1への対応や以下に例示する点を踏まえて、本学科の教育課程が適切なディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに基づき、修得すべき知識や能力等に係る教育が網羅され、体系性が担保された上で、適切に編成されていることを明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

3.(1)「設置の趣旨等を記載した書類(本文)」p.7の「(2)文理融合的な視点から人間理解をし、主体的な行動にむかう力をつける」において、本学科の特色は「人間のあり方を実証的・科学的に探究する“Human”の領域と“Society”の領域を相互に学ぶことを通して、人間理解を進めること」と説明していることから、「“Human”の領域」については、いわゆる人間科学を意味する「Human Science」を意図しているものと見受けられる。一方、「心理学の知識や技能を丁寧に学ぶことを主眼とする」とも説明されており、また、同書類 p.9の「(3)教育課程編成に関わる特色」では、「自分や他者について深く学び理解することを目指す」分野であると説明していることから、いわゆる人文科学を意味する「Humanities」を意図しているとも見受けられ、扱う分野が判然としない。このため、関連する意見を踏まえ、本学科が扱う「“Human”の領域と“Society”の領域」の内容を具体的かつ明確に説明すること。また、学生に対して学修する内容が適切に伝わるよう、必要に応じて「“Human”の領域と“Society”の領域」との説明を適切に改めること。

(対応)

(1)リベラルアーツ学科で考える“Human”，“Society”について

リベラルアーツ学科では、「基礎的教養を基盤として、人間を理解することと地域を理解することを通じて、現代の社会が抱えている諸課題に気づき、その課題について複眼的かつ俯瞰的に捉え、また、実証的・科学的に探究することで課題の背景・要因を多面的に捉え、社会と文化の多様性を尊重し、人間理解に立脚した社会貢献を果たす意欲を持って、未来に繋がる課題の解決策を提示できる人」の養成を「教育研究上の目的」として掲げている。

“Human”と“Society”は、そこで示した、「現代の社会が抱える諸課題について気づき」、あるいはそれらの課題について「複眼的かつ俯瞰的に捉え」るための、また「実証的・科学的に探究すること」で、そうした人材を養成することを目指して採った考え方であり、あくまでも課題を発見し、また解決に至るプロセスの中で活用する視点である。すなわち“Human”は、心理学的な方法により人間を理解するための視点を意図し、一方、“Society”は、自身が地域や社会を構成する「市民」の一人であることを自覚し、地域が抱える課題に向き合うための視点を意図したものである。そのため、既存の学問領域を示したものではない。

(2)「“Human”の視点」「“Society”の視点」と DP との対応関係

上記(1)で定義した「“Human”の視点」と「“Society”の視点」は、次のように DP の中に含めている。

DP2(気づく力)においては、人間を理解するため(「“Human”の視点」)、また地域を理解するため(「“Society”の視点」)の切り口、まさに視点として位置付けて、二つの視点を獲得することを目指している。

DP3(観る力)においては、人間を理解するための視点(「“Human”の視点」)から、また地域を理解するための視点(「“Society”の視点」)をもって、複眼的かつ俯瞰的に現代社会が抱える諸問題について探究・考察できるようになることを目指している。DP4(磨く力)においても同様に、人間を理解するための視点(「“Human”の視点」)と地域を理解するための視点(「“Society”の視点」)から科学的・実証的な態度で諸問題に取り組み、その解決策を模索できるようになることを目指している。

そして DP5(繋ぐ力)では、現代社会が抱える諸問題を解決していくには他者と協働することが必須であり、それには社会や文化の多様性について理解と、それを尊重する態度が求められることから、地域を理解するための視点(「“Society”の視点」)が重要な役割を果たすことになる。

(3)授業科目と「“Human”の視点」「“Society”の視点」との関係について

具体的な科目としては、人間を理解するための視点(「“Human”の視点」)は、「人間を理解するための科目」群に、他方、地域を理解するための視点(「“Society”の視点」)は、「地域を理解するための科目」群に対応している。そして「PBL 科目」群においても、「“Human”の視点」は「実践演習基礎(Human)」(1年次)「人間科学実践演習Ⅰ」(2年次)に、「“Society”の視点」は「実践演習基礎(Society)」(1年次)「地域課題実践演習Ⅰ」(2年次)などに対応している。本学科では、これら4科目を必修科目としており、人間を理解するための視点(「“Human”の視点」)と地域を理解するための視点(「“Society”の視点」)の両方を身につけることができるよう科目を配置している。

なお、人間を理解するための視点(「“Human”の視点」)は、自己、そして他者を起点として人間を理解するためのものであるため、「人間を理解するための科目」群の中の「心理学研究法」や「心理学研究演習(面接・観察)」といった科目を履修し、心理学的な方法・手法を身につけることにより養成し、観る力・磨く力を獲得することを目指す。一方、地域を理解するための視点(「“Society”の視点」)については、自身が地域や社会を構成する「市民」の一人であることを自覚し、地域が抱える課題に向き合うことができるようになるためのものであることから、「家族関係論」や「東大阪学」といった学生に身近な社会・集団を起点としながら、地域や社会について学ぶことにより養成し、観る力や磨く力を獲得することを目指す。

＊「リベラルアーツ学科全体構想図」(前出)

(是正事項)学芸学部リベラルアーツ学科

3.(2) (1)のとおり、「“Human”の領域と“Society”の領域」の内容が判然としないが、「設置の趣旨等を記載した書類(資料)」の資料1「履修モデル」によれば、「Human の PBL 科目を選択し、Human に関連する科目に重きを置いた場合」と「Society の PBL 科目を選択し、Society に関連する科目に重きを置いた場合」の2種類のモデルしか示されていないことから、「“Human”の領域」に特化した人材と「“Society”の領域」に特化した人材を養成する計画であるように見受けられる。しかしながら、本学科は、例えばディプロマ・ポリシーに「文理の枠を超えた視点」を掲げ、それにより授与する学位について、「設置の趣旨等を記載した書類(本文)」p.8で「文理融合型のリベラルアーツという複合的な分野」と説明していることなどを踏まえると、特定の分野に偏らない異分野融合的な人材を養成する計画であると見受けられることから、適切な履修モデルが示されているのか疑義がある。このため、本学科の養成する人材、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに基づいた適切な履修モデルを示すとともに、学生がディプロマ・ポリシーに掲げる素養を確実に修得できる履修体系が組まれていることを明確に説明すること。

(対応)

当初の申請書類では、“Human”の視点と“Society”の視点に対応する学びの比重を変えることで履修モデルとしようとしたが、ご指摘の通り、本学科の設置の趣旨・教区研究上の目的・養成する人材像等から適切な履修モデルとはいえないため、以下のように履修モデルを修正する。

履修モデルについては、以下の3つを作成する。【資料1:履修モデル】

1. 専攻科目を重点的に履修したモデル

このモデルは、専攻科目のうち、「人間を理解するための科目」と「地域を理解するための科目」をすべて履修し、「PBL 科目」についても選択必修とされている3年次配当の科目もすべて履修した場合を想定したモデルである。

2. データサイエンス関連科目を重点的に履修したモデル

このモデルは、専攻科目の「データスキル科目」をすべて履修し、さらに「学士課程基幹教育科目」で提供されている「数理情報科目」についてもすべて履修することで、データサイエンスに関連する科目を網羅的に履修した場合を想定したモデルである。3年次配当の「PBL 科目」については選択必修とされている2科目を履修するようになっており、一例として人間理解の実践的授業の履修を想定している。この履修モデルでは、本学が提供する文部科学省の「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」のリテラシーレベルと応用基礎レベルに対応した教育プログラムを修了することになる。

3. 学生課程基幹教育科目を重点的に履修したモデル

このモデルは、専攻科目は必修科目と主要授業科目を中心に履修し、他のモデルより幅広い教養を身につけるため「学士課程基幹教育科目」から多くの科目を履修することを想定したモデルである。リベラルアーツ学科の特色となっている他学科では指定がある「学士課程基幹教育科目」と専門教育としての「専攻科目」の最低履修単位数の指定をしていないことを反映したモデルとなっている。

本学リベラルアーツ学科では、特定の分野に偏らない学びに重点をおいており、多くの大学で設置されている一般教育・共通教育に該当する「学士課程基幹教育科目」について、特定の領域に偏らないよう「自然の理解」「人文の探究」「社会への視点」3つの領域それぞれにおいて、科目を選択し、問題を発見する力や解決に向けて継続的に取り組む力、他者への理解をふまえ協力して活動できる力を獲得するようにするため、3領域ごとに最低履修単位数を指定している。

上記の3つのモデルについても、特定の学び・学問分野に特化したものではなく、それぞれのバランスを重視して想定しているものであり、「学士課程基幹教育科目」および「専攻科目」を総合してディプロマポリシーに掲げた能力の獲得をめざすものである。

新	旧
【資料1:履修モデル】 専攻科目を重点的に履修したモデル データサイエンス関連科目を重点的に履修したモデル 学生課程基幹教育科目を重点的に履修したモデル	設置の趣旨等を記載した書類(資料) 【資料2】履修モデル 3年次より Human の PBL 科目を選択し、Human に関連する科目に重きを置いた場合 3年次より Society の PBL 科目を選択し、Society に関連する科目に重きを置いた場合

(是正事項)学芸学部リベラルアーツ学科

3.(3) 審査意見1(4)のとおり、カリキュラム・ポリシーの妥当性が判断できないため、ディプロマ・ポリシーに掲げる「文理の枠を超えた視点」を達成するためのカリキュラム・ポリシーが判然としないが、「設置の趣旨等を記載した書類(本文)」p.7では、本学科の教育上の特色である「文理が融合した学びを展開できる環境」として、「文理異なる学科が同一キャンパス内にあり、それぞれの学科が提供する専門教育を互いに補完し合うことが可能である。この利点を活かすことで、文理融合的な学びを…提供できる」ことや、「学問領域の範囲を超えての学びを可能にする」と説明している。しかしながら、専門科目のカリキュラムには、心理学などの文系科目が多く見受けられるが、理系科目については、科目区分「データスキル科目」に見受けられるものの、心理学などの学修に必要なデータスキルの内容に限った科目しか見受けられないことから、理系の内容を学修する科目が少ないと見受けられ、「文理の枠を超えた視点」や「文理が融合した学び」のための教育課程をどのように編成しているのか判然としない。このため、関連する意見への対応を踏まえ、ディプロマ・ポリシーに掲げる「文理の枠を超えた視点」を修得するために、どのように「文理が融合した学び」や「学問領域の範囲を超えての学び」のための教育課程を編成しているのかについて、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーとの関係性を明確にしつつ、具体的に説明すること。

(対応)

設置の趣旨・目的等の是正事項に対応するため、本学のリベラルアーツの定義を改めて定め、養成する人材像、教育研究上の目的、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシーの見直しを行った。

教育研究上の目的に掲げている基礎的教養を基盤とするは、学士課程基幹教育科目の言語科目、数理情報科目、樟蔭教養科目(「自然の理解」「人文の探究」「社会への視点」「体験の方法」)、キャリア系科目をもって構成し、教養に重点をおいていることから、当初使用していた文理の表現は相応しくないと考え、表現を改めた。

(1)リベラルアーツの定義

現代社会においては、社会生活に必要とされる知識は膨大な量となっているにもかかわらず、それを学び、自己形成を果たすことが求められている。しかも知識は日々更新されており、その総量は増え続けるばかりである。そうした膨大な知識をすべて学び尽くすことは、ほぼ不可能である。とするならば、現代社会を生きていく上で重要となるのは、単なる知識の多寡ではなく、修得した知識を「何のために」、そして「どのように使うか」であろう。すなわち、現代社会の担い手である市民の一人として知識を如何に使うかという“知恵”が問われていると言えよう。

本学科では、そうした知識の使い手としての“知恵”を「リベラルアーツ」と定義する。そしてかかる意味での“知恵”を、「気づく力」「観る力」「磨く力」「繋ぐ力」から涵養していくことを目指す。

(2)養成する人材像

基礎的教養を基盤として、人間を理解することと地域を理解することを通じて、現代の社会が抱えている諸課題に気づき、その課題について複眼的かつ俯瞰的に捉え、また、実証的・科学的に探究することで課題の背景・要因を多面的に捉え、社会と文化の多様性を尊重し、人間理解に立脚した社会貢献を果たす意欲を持って、未来に繋がる課題の解決策を提示できる

(3)教育研究上の目的

リベラルアーツ学科の教育研究上の目的は、基礎的教養を基盤として、人間を理解することと地域を理解することを通じて、現代の社会が抱えている諸課題に気づき、その課題について複眼的かつ俯瞰的に捉え、また、実証的・科学的に探究することで課題の背景・要因を多面的に捉え、社会と文化の多様性を尊重し、人間理解に立脚した社会貢献を果たす意欲を持って、未来に繋がる課題の解決策を提示できる人材を養成することである。

(4)ディプロマポリシー

リベラルアーツ学科は、養成する人材像および教育研究上の目的に基づき、本学の所定の課程を修め、次のような能力を身につけた学生の卒業を認定し、学位を授与する。

(DP1) 基礎的教養：特定の分野に偏らない、人間や社会、自然に関する基礎的知識と分析のための手法を身につけている

(DP2) 気づく力：修得した知識や技術を統合し、取り組むべき課題を発見することができる

(DP3) 観る力：発見した課題について、その多様な背景に留意しながら複眼的かつ俯瞰的に観るとともに、身につけた手法を用いて検討することができる

(DP4) 磨く力：既存の知識、専門にとらわれず学び続け、修得した知識や技術を活かしながら課題解決に向けた努力ができる

(DP5) 繋ぐ力：他者と繋がり、合理的判断、論理的思考だけでは解決困難な課題について協働して取り組むことができる

(新旧対照表)

① 設置の趣旨及び必要性

(1)設置の趣旨(前出)

(2)養成する人材像(前出)

(3)教育研究上の目的とディプロマポリシー(前出)

(是正事項)学芸学部リベラルアーツ学科

3.(4)「設置の趣旨等を記載した書類(本文)」p.7において、本学科の教育上の特色として「“Human”分野ならびに“Society”分野に関わるさまざまなレベルの課題解決を模索する学びを展開する PBL 科目を中心に、実践的な学びを入学直後から展開し、課題解決能力を身に付け、リーダーシップを発揮して意思決定に携わることのできる能力を育成することが本学科の強みであり、最大の特色である」と説明し、同書類 p.5では「PBL 科目は総合的に、気づく力、観る力、磨く力、繋ぐ力というディプロマ・ポリシーすべてにつながるものである」と説明していることから、本学科の教育上「PBL 科目群」が重要な位置づけであるように見受けられる。しかしながら、カリキュラム・ポリシーにおいて、学修成果の評価の在り方等に関する具体的な記述が見受けられないことから、「PBL 科目群」を通じて涵養しようとする素養が十分に身に付けられる計画となっているのか判然としない。このため、カリキュラム・ポリシーは、学修成果をどのように評価するのかの方針も含むものであることを踏まえ、「PBL 科目」を含め、教育課程全体の学修成果の評価の在り方を明確に説明すること。

(対応)

リベラルアーツ学科では、学んだ知識を活用できる“知恵”の養成を目指した教育課程を編成しているため、活用する力を評価する評価の方法を定めることは極めて重要であると認識している。

しかし、審査意見の通り、カリキュラムポリシーに評価方針が定められていなかったため、カリキュラムの中心となる「PBL 科目」群を通じて涵養しようとする素養を養成できるのかどうか不明瞭な内容となっていた。

以上の点から、審査意見の通り、他の審査意見への対応と共に、CP に新たに「学修成果の評価の方針」(CP7)を以下の通り定めた。

(CP7) リベラルアーツ学科専攻科目の学修成果は、総合評価により評価する。その際、学修成果に至る過程で行うパフォーマンス等に対する形成的評価を重視する。また、外部アセスメント・テストも活用する。

(是正事項)学芸学部リベラルアーツ学科

4. 審査意見1(5)のとおり、アドミッション・ポリシーの妥当性が判断できないため、入学者選抜の方法の妥当性についても判断できない。このため、関連する意見への対応や以下に例示する点を踏まえて、本学科の養成する人材像、3つのポリシーに基づいた適切な選抜方法であることを明確に説明するとともに、必要に応じて改めること。

4.(1) アドミッション・ポリシーでは、「高等学校までの履修内容のうち、「国語」、「英語」を通じて、コミュニケーションの基礎となる、聞く・話す・読む・書く力を身につけている」ことを掲げている。しかしながら、「設置の趣旨等を記載した書類(本文)」p.15において、例えば、一般選抜入試では「文理融合の特徴及びアドミッションポリシーに照らし合わせて、英語・国語・数学のうち2科目を選択必須とする」と説明し、「自己推薦入試<基礎学力型>として、英語・国語・数学・理科(化学・生物・化学基礎＋生物基礎)から1科目選択する」と説明しているように、英語や国語を必ずしも選択しなくてよいため、本学科の教育を受けるために入学者選抜段階で求める資質・能力を適切に評価・判定できる選抜方法となっているのか疑義がある。このため、選抜方法ごとに、アドミッション・ポリシーに掲げるどの資質・能力を、どの方法によって評価・判定するのかを明確に説明すること。

(対応)

アドミッションポリシーに掲げる「高等学校までの履修内容のうち、「国語」、「英語」を通じて、コミュニケーションの基礎となる、聞く・話す・読む・書く力を身につけている」については、高等学校における「国語」や「英語」の履修を通して身につけた「コミュニケーション力」について述べたものである。指摘の通り、一般選抜入試においては英語や国語を必ずしも選択しなくてもよいものとなっているが、選択された科目以外の基礎的学力については、調査書を用いて総合的に評価するものとしており、当該アドミッションポリシーに掲げる「コミュニケーション力」を測定し、受験者が適正な資質・能力を有しているのかを判定することができると考える。これに加えて調査書を精査することにより、アドミッションポリシーに掲げる能力や意欲を評価する。さらには、同時に面接試験を実施する場合は、より適切な能力や意欲の評価が可能となると考えている。

リベラルアーツ学科の選抜に関わる入試形態は、16種類あり、これらの選抜方法ごとに、どの判定資料に基づき、それぞれのアドミッションポリシーとの整合性について評価するのかについては、一覧表を作成した。次ページにこれを提示する。

対応するDP		DP1	DP4	DP1	DP1	DP1	DP1
		DP2	DP5	DP2	DP2	DP2	DP2
		DP3		DP3	DP3	DP3	DP3
				DP4	DP4	DP5	DP4
				DP5			DP5
アドミッション・ポリシーとの関連							
入学者選抜の種別	判定資料	AP1	AP2	AP3	AP4	AP5	AP6
SHOIN探究型	書類審査	○	○	○			
	探究レポート		○	○		○	○
	面接		○	○	○	○	○
	調査書	○	○		○		
探究学習評価型	書類審査	○	○	○			
	プレゼンテーション書類		○	○		○	○
	プレゼンテーション		○	○	○		
探究LIVE型	書類審査	○	○	○			
	探究課題			○		○	○
	面接		○	○	○	○	○
	調査書	○	○		○		
自己推薦入試 <基礎学力型>	基礎学力テスト	○					
	調査書	○	○	○	○	○	○
指定校推薦入試A 協定校推薦入試	書類審査	○	○	○			
	調査書	○	○		○		
	小論文	○	○	○			
	面接		○	○	○	○	○
指定校推薦入試S	書類審査	○	○	○			
	調査書	○	○				
	小論文	○	○	○			
	面接		○	○	○	○	○
スポーツ／文化・芸術	小論文	○	○	○			
	面接		○	○	○	○	○
	調査書	○	○		○		
特別選抜 社会人・帰国子女	小論文	○	○	○			
	面接		○	○	○	○	○
	調査書	○	○		○		
留学生入試	出願資格（N2）	○	○				
	面接		○	○	○	○	○
一般入試A （スタンダード型）	学力テスト2科目	○	○			○	
	調査書	○	○	○	○	○	○
一般入試A （学習活動評価型）	学力テスト2科目	○	○			○	
	調査書	○	○	○	○	○	○
一般入試B （スタンダード型）	学力テスト2科目	○	○				
	調査書	○	○	○	○	○	○
一般入試B （面接型）	学力テスト2科目	○	○			○	
	面接		○	○	○	○	○
	調査書	○	○		○		
	書類審査	○	○	○			○
一般入試C （スタンダード型）	学力テスト1科目	○	○				
	面接		○	○	○	○	○
	調査書	○	○		○		
一般入試C （総合型）	総合問題	○	○	○			
	面接		○	○	○	○	○
	調査書	○	○		○		
一般入試D （総合型）	小論文	○	○	○			
	面接		○	○	○	○	○
	調査書	○	○		○		

(是正事項)学芸学部リベラルアーツ学科

4.(2)「設置の趣旨等を記載した書類(本文)」p.15 において、「特徴的な入試として『探究型(探究 LIVE 型, SHOIN 探究型, 探究学習評価型)』を設定する」と説明している。しかしながら、「この3タイプはいずれも本学科が修得を目指す PBL 型の探究学習の基礎力を測定することを目的とした入試である」と説明しているものの、3タイプそれぞれの違いについて説明されていないため、選抜方法が判然とせず、アドミッション・ポリシーに基づいた適切な選抜方法になっているか判断ができない。このため、探究型の3タイプそれぞれについて、具体的な選抜方法を明確に説明すること。

(対応)

総合型選抜入試において、設定する「探究型」の3タイプについて、次の通りである。

それぞれは、受験生が探究学習にどのように取り組むことができるのか、取り組んできたのかを評価する入試であり、本学科のカリキュラムで求められる学修と直結した能力を測定する。

①「SHOIN 探究型」

今後自身の学びのフィールドとなる「大阪樟蔭女子大学」「樟蔭学園」について、自らテーマを設定し、テーマが決定した後、情報を収集する等して調査、分析し、自分の考えなどをレポートにまとめる。面接において、このレポートをもとに口頭試問により、志望理由書及び調査書をもとにアドミッションポリシーとの整合性を評価する。

②「探究学習評価型」

高校3年間の「総合的な探究の時間」で取り組んだ課題テーマから選定し、それについて「プレゼンテーション書類」としてまとめる。面接において、どのようにテーマを設定し、どのように取り組んできたのかについて、プレゼンテーションと口頭試問により、志望理由書及び調査書をもとにアドミッションポリシーとの整合性を評価する。

③「探究 LIVE 型」

試験当日に与えられる課題テーマに対して、大学内の環境(図書館等)を活用しながら探究し、その成果及び自身の考えをまとめ、そのプレゼンテーションと口頭試問により、志望理由書及び調査書をもとにアドミッションポリシーとの整合性を評価する。

(是正事項)学芸学部リベラルアーツ学科

5. 教員資格審査において、「不可」や「保留」、「適格な職位・区分であれば可」となった授業科目について、当該授業科目を担当する教員を基幹教員以外の教員で補充する場合には、主要授業科目は原則として基幹教員が担当することとなっていることを踏まえ、当該授業科目の教育課程における位置付け等を明確にした上で、当該教員を後任として補充することの妥当性について説明すること。

(対応)

教員資格審査において、「不可」となった辻弘美の「心理学概論」について、オムニバス科目の担当のうち、社会心理学の分野の担当を永野光朗(基幹教員以外の教員)に交代する。当科目は教育課程上、主要授業科目として位置付けているが、永野光朗は本学学芸学部心理学科の基幹教員であり、社会心理学を専門として長年大学に勤め、業績も充分にあり、2015年度には京都橘大学大学院健康科学研究科健康科学専攻(修士課程)設置認可申請に伴う教員審査において「応用社会心理学特論」を担当可とされていることから、適任であると判断した。なお、当科目は複数教員によるオムニバス科目であり、リベラルアーツ学科の基幹教員(佐久田祐子)も担当し、科目全体の実施状況を把握する。

また、教員資格審査において、「不可」となった門正博の「物理で考える暮らし」について、担当を實本正樹(基幹教員以外の教員)に交代する。当科目は、学士課程基幹教育科目の科目であり、主要授業科目としては位置付けていないことから、学内において適任と判断した實本正樹を後任として補充する。

(改善事項)学芸学部リベラルアーツ学科

6. 基幹教員の年齢構成が高齢に偏っていることから、教育研究の継続性の観点から、若手教員の採用計画など教育研究実施組織の将来構想を明確にすること。

(対応)

完成年度の2028年度末に退職年齢である65歳を超える教員は3人である。よって、完成年度を迎えるまでに、定年を超える教員の専門分野に係る若手教員の採用手続きを行う(採用した教員の着任は完成年度後)。

完成年度以降も、年齢構成等を踏まえた教員採用計画を策定し、採用を行うことで、教育研究体制の継続及び充実を図る。

教員の採用計画は、以下の通りである。

2029年度3人, 2031年度1人

※途中退職等により欠員が生じた場合は、適宜、採用を行う。

(新旧対照表)

⑩ 教育研究実施組織等の編制の考え方及び特色

(研究分野・研究体制 p.16)

新	旧
リベラルアーツ学科の基幹教員としては、現在本学に所属する専任教員から4名、新たに採用する教員が3名という構成である。学科設置時の2025年3月31日現在の教員の年齢構成は、70歳、63歳、62歳、59歳、54歳、53歳、40歳である。本学の定年は65歳であり、特例として65歳以上であっても引き続き教員として雇用することも規定されている。完成年度である2029年3月31日までに、3名の教員が定年を迎えるが、特例として引き続き教員として雇用することで、研究教育の継続性を担保する。【資料2】定年規程 <u>完成年度以降の採用計画は以下の通りである。</u> <u>2029年度3人, 2031年度1人</u> <u>※途中退職等により欠員が生じた場合は、適宜、採用を行う。</u>	リベラルアーツ学科の基幹教員としては、現在本学に所属する専任教員から4名、新たに採用する教員が3名という構成である。学科設置時の2025年3月31日現在の教員の年齢構成は、70歳、63歳、62歳、59歳、54歳、53歳、40歳である。本学の定年は65歳であり、特例として65歳以上であっても引き続き教員として雇用することも規定されている。完成年度である2029年3月31日までに、3名の教員が定年を迎えるが、特例として引き続き教員として雇用することで、研究教育の継続性を担保する。【資料2】定年規程

(是正事項)学芸学部リベラルアーツ学科

7. 「設置の趣旨等を記載した書類(本文)」p.12 の「(1)教育方法」において、「授業は、講義、演習、実験、実習もしくはそれらの併用により行う」と説明している。一方で、同書類 p.20-21 の「(2)校舎等施設の整備計画」では、本学科の「教育課程においては、講義室、演習室、情報処理室が必要となる」と説明しているが、「実験」を実施する「実験室」について説明がないことから、本学の教育課程を実施するための必要な施設・設備が十分に整備されているが疑義がある。このため、「実験」を実施する科目や、当該科目のために必要となる施設・設備を明らかにし、施設・設備が本学科の教育研究に支障なく十分に整備されている計画であることを明確に説明すること。

(対応)

教育課程等の概要において授業形態が「実験・実習」となっている科目、及び当該科目の基本的な実施場所は下記の通りである。

- ・情報処理基礎 A →情報処理室で実施(情報処理室について説明済み)
- ・情報処理基礎 B →情報処理室で実施(情報処理室について説明済み)
- ・和の伝統芸道 →講義室で実施(講義室について説明済み)
- ・レクリエーションと健康 →講義室で実施(講義室について説明済み)
- ・運動と健康 A →体育館で実施(体育館について説明済み)
- ・運動と健康 B →体育館で実施(体育館について説明済み)
- ・キャリア実習 A →講義室及び学外での実習(講義室について説明済み)
- ・キャリア実習 B →講義室及び学外での実習(講義室について説明済み)
- ・キャリア実習 C →講義室及び学外での実習(講義室について説明済み)
- ・社会とコミュニケーション →レクリエーション実習室で実施(児童教育学部の実習室を使用する。時間割上の配置の工夫により、児童教育学部の教育研究には支障なく実施可能である)
- ・心理学実験 →講義室及び情報処理室で実施(講義室・情報処理室について説明済み)
- ・心理調査基礎実習 →講義室で実施(講義室について説明済み)
- ・科学的思考実験 →講義室で実施(講義室について説明済み)
- ・量的データ解析実習 →講義室で実施(講義室について説明済み)

よって、実験・実習科目についてはほとんどの科目が講義室、演習室、情報処理室で実施可能であり、一部の実習科目は児童教育学部の実習室を使用するが、時間割上の配置の工夫により、児童教育学部の教育研究には支障なく実施可能であるため、施設・設備は本学科の教育研究に支障なく十分に整備されている。

(是正事項)学芸学部リベラルアーツ学科

8. 申請書類について、例えば「設置の趣旨等を記載した書類(本文)」において、p.5～6において「基礎科目群の学びの上に…データスキル科目群を配置される」と文法が誤っていると見受けられる記載や、p.16 において「…を活用しので、」と訂正線が付されている文字が見受けられるなどの誤記等が見受けられることから、申請書類全般について網羅的に再点検を行った上で、適切に改めること。

(対応)

申請書類全般について網羅的に再点検を行い、誤記等を修正した。

(是正事項)学芸学部リベラルアーツ学科

9. 「学生の確保の見通し等を記載した書類(本文)」p.33 において説明している学生確保に関するアンケート調査の結果の分析について、クロス集計の結果は「24 人」と説明しており、本学科の入学定員 40 名を満たさない結果となっている。また、当該クロス集計結果に対し、学芸学部の既設学科における過去3年間の志望度別入学率の平均を乗じることにより、「74 人」が対象となり得る人数であると結論付けているが、本学科は「リベラルアーツ」を扱う、既設学科とは異なる特色を持つ学科であることを踏まえれば、既設学科の過去3年間の平均入学率を用いることの妥当性に疑義がある。さらに、この「74 人」について、「仮に、第2, 第3志望者について既設学科の統計的数値を新設学科に適用することに難しい面があるとして、この比率を2分の1として見積もったとして…厳しく見込んで 46 人が選抜対象者と予測し、40 人の入学生を見込める」と説明しているが、2分の1と見積もる根拠について説明がなく、「46 人」と見込むことの妥当性にも疑義がある。したがって、客観的かつ妥当な根拠が示されていないことから、入学定員に対応した学生の確保を長期的かつ安定的に図ることができる見通しがあるとは判断できないため、改めて客観的かつ具体的なデータ等の根拠に基づき明確に説明すること。

(対応)

審査意見にて、「既設学科の過去3年間の平均入学率を用いることの妥当性に疑義がある」「2分の1と見積もる根拠について説明がなく、「46 人」と見込むことの妥当性にも疑義がある」とご指摘を頂いたため、それぞれの疑義に対して以下の通り説明し、該当する箇所の修正を行った。

(1) 既設学科の過去3年間の平均入学率を用いることができると考えた理由

以下2点の理由により、特色が異なる学科であっても、同程度の入学率が予想されると判断し、学芸学部の入学率を活用した。

理由①： 本学の平均入学率は学科ごとに大きな差は確認されなかったため、他学科の入学率を活用しても問題ないと考えた。【表 1】

理由②： 全国的なデータにおいても、理系・文系問わず、入学率に大きな差異が確認されなかったため、学科の特徴や学問体系によって入学率は大きく変わらないと考え、他学科の入学率を活用しても問題ないと考えた。【表2】

株式会社ディスコ キャリタスリサーチによる「大学進学と就職に関する調査」(2017 年)
(https://www.disc.co.jp/wp/wp-content/uploads/2018/03/DaigakuShingaku_Shushoku_report_201803.pdf)

以上からも、学問系統と入学志望度には関係性がないため、リベラルアーツ学科が既設学科と異なる特色であったとしても、同程度の結果になると考え、既設の学芸学部の数字を使用した。

新	旧																				
(略) 1. アンケートにおける第 1.2.3 それぞれ志望者数に、上記 2.の比率を乗じる。 なお、当該比率 (学芸学部の入学率) 適用の根拠は次の通りである。 本学の平均入学率は、学科ごとに大きな差は確認されなかったため (【資料13】)、新学科が置かれる既設の学芸学部における志望度に応じた過去の平均入学率を活用しても問題ないとした。 b) 全国的なデータにおいて、理系・文系問わず、入学率に大きな差異が確認されなかったため、学科の特徴や学問体系によって入学率は大きく変わらないと考え、既設学科の入学率を活用しても問題ないと考えた。 I. 大学進学と就職について (1) 入学した大学の志望順位と大学生活の満足度 ■ 入学した大学・学部・学科の志望順位 (受験時何番目の志望だったか) <table><thead><tr><th>学部・学科</th><th>第1志望</th><th>第2志望</th><th>第3志望</th><th>第4志望以下</th></tr></thead><tbody><tr><td>全体</td><td>49.7%</td><td>20.8%</td><td>13.7%</td><td>15.9%</td></tr><tr><td>文系</td><td>49.8%</td><td>21.2%</td><td>13.5%</td><td>15.5%</td></tr><tr><td>理系</td><td>49.5%</td><td>20.1%</td><td>13.9%</td><td>16.5%</td></tr></tbody></table> ・ 回答者の約半数 (49.7%) は、第1志望の大学に入学。 ・ 第4志望以下の大学に入学した人は全体の15.9%。 ・ 文理ともに、8割以上が志望順位の高い (第1～3志望) 大学に入学している。 「大学進学と就職に関する調査」 p.2, 2017 年, 式会社ディスコキャリアタスリサーチ https://www.disc.co.jp/wp/wp-content/uploads/2018/03/DaigakuShingaku_Shushoku_report_201803.pdf 以上からも、学問系統と入学志望度には関係性がないため、リベラルアーツ学科が既設学科と異なる特色であったとしても、	学部・学科	第1志望	第2志望	第3志望	第4志望以下	全体	49.7%	20.8%	13.7%	15.9%	文系	49.8%	21.2%	13.5%	15.5%	理系	49.5%	20.1%	13.9%	16.5%	(略) 1. アンケートにおける第 1.2.3 それぞれ志望者数に、上記 2.の比率を乗じる。
学部・学科	第1志望	第2志望	第3志望	第4志望以下																	
全体	49.7%	20.8%	13.7%	15.9%																	
文系	49.8%	21.2%	13.5%	15.5%																	
理系	49.5%	20.1%	13.9%	16.5%																	

同程度の結果になると考え、既設の学芸学部 の比率（数字）を使用した。	
∴第1志望者の入学選抜対象者見込み 24人×82.4%＝19人 ∴第2志望者の入学選抜対象者見込み 57人×44.4%＝25人 ∴第3志望者の入学選抜対象者見込み 263人×11.5%＝30人	∴第1志望者の入学選抜対象者見込み 24人×82.4%＝19人 ∴第2志望者の入学選抜対象者見込み 57人×44.4%＝25人 ∴第3志望者の入学選抜対象者見込み 263人×11.5%＝30人

(2) 「74人」の入学希望者の見込みを「46人」とした件の対応・修正内容

あえて入学者数を少なく見積もるとして、使用比率の2分の1の比率を適用したが、ご指摘のとおり使用に明確な根拠はなく、当該見積もりは、取り下げる（記載文より削除する）。

（新の下線は原文にあり、網掛け部分を削除）

新	旧
（略） 初年度の入学試験における選抜対象者として、第1志望者と考えることができる 19 人に、第2志望者、第3志望者層からの入学者選抜対象となる見込み 55 人を加えて、<u>74 人</u>と予測し、そのうえで選抜して 40 人の入学生を見込める。	（略） 初年度の入学試験における選抜対象者として、第1志望者と考えることができる 19 人に、第2志望者、第3志望者層からの入学者選抜対象となる見込み 55 人を加えて、<u>74 人</u>と予測し、そのうえで選抜して 40 人の入学生を見込める。<u>仮に、第2、第3志望者について既設学科の統計的数値を新設学科に適用することに難しい面があるとして、この比率を2分の1として見積もったとしても、(19人)+(57人×22.2%＝12人)+(263人×5.75%＝15人)で、厳しく見込んで46人が選抜対象者と予測し、40人の入学生を見込める。</u>

【表1】

受験率・入学率

志望学科・専攻・コース	入学を決めている		入学したい		併願校として考えている	
	受験率 (②÷①)	入学率 (③÷①)	受験率 (②÷①)	入学率 (③÷①)	受験率 (②÷①)	入学率 (③÷①)
学芸学部	87.4%	82.4%	48.1%	44.4%	23.0%	11.5%
国文学科	88.9%	83.3%	45.0%	45.0%	33.3%	20.0%
国際英語学科	75.0%	75.0%	22.2%	22.2%	9.1%	9.1%
心理学科	90.9%	90.9%	59.4%	56.3%	28.6%	14.3%
ライフプランニング学科	81.5%	81.5%	47.4%	47.4%	30.0%	20.0%
化粧ファッション学科 ファッション学コース・化粧学コース	89.4%	82.4%	46.7%	41.7%	20.8%	4.2%
化粧ファッション学科 美容コース	85.7%	75.0%	50.0%	40.0%	0.0%	0.0%
児童教育学部	92.1%	89.5%	54.5%	51.5%	25.0%	14.3%
児童教育学科	92.1%	89.5%	54.5%	51.5%	25.0%	14.3%
健康栄養学部	91.4%	87.9%	49.1%	42.1%	35.4%	13.8%
健康栄養学科 管理栄養士専攻	89.6%	87.5%	47.9%	41.7%	34.5%	13.8%
健康栄養学科 食物栄養専攻	100.0%	90.0%	55.6%	44.4%	42.9%	14.3%
全学科・専攻・コース平均	89.5%	84.7%	49.8%	44.6%	27.2%	12.8%

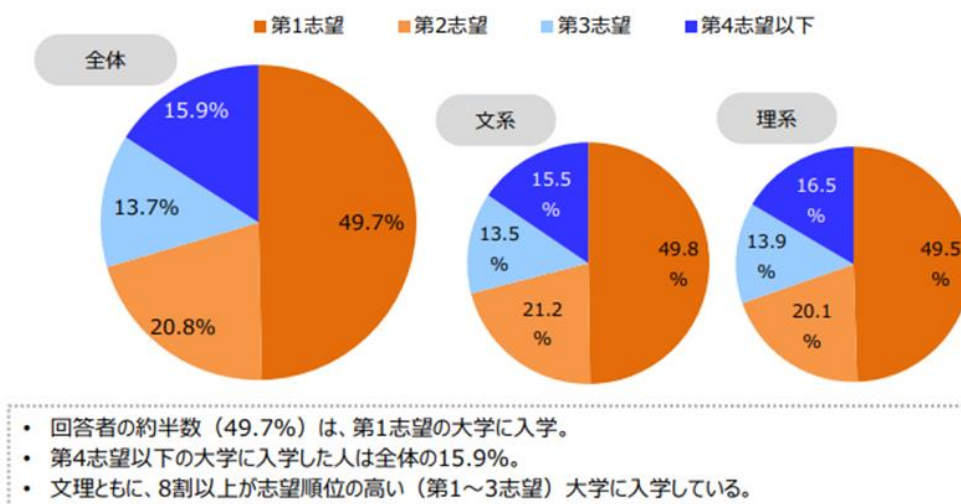
学生確保(資料)の【資料 13】の資料について、再掲(但し、説明に要する箇所のみを抜粋)

【表 2】

I. 大学進学と就職について

(1) 入学した大学の志望順位と大学生活の満足度

■ 入学した大学・学部・学科の志望順位（受験時何番目の志望だったか）



「大学進学と就職に関する調査」p.2, 2017 年, 株式会社ディスコキャリアタスリサーチ